刊行の辞

黒田　彰
坂井　健
水谷隆之

谷口博子さんは、平成三十年六月十一日に、病のため急逝された。本書は、谷口さんの学位請求論文である。日本文学科は急遽それを、今年の十一月三十日に刊行される『京都語文』二十七号の別冊として公刊することにした。以下、その間の事情をいささか摘記して刊行の辞に代えたい（黒田が論文審査員を代表して筆を執った）。

谷口さんは、平成三十年五月二十九日に、学位請求論文『近松門左衛門作浄瑠璃の研究』を大学に提出された。その折、黒田の研究室に挨拶に来られ、結局それが彼女の元気な顔を見る最後の機会となってしまった。その三十日付のメールに、今後の治療に触れて、

でも頑張ります。先生のお言葉どおり、この一日をどう過ごすか、一日一日、このことだけを考えて頑張ります。本は〔学位論文を刊行すること〕、絶対に諦めません。出版まで必ずこぎつけたいです

とあり、このメールが黒田の受け取った最後のメールとなる。一方、大学においては、六月十三日の文学研究科教授会の第一議題「【通学課程】博士の学位請求論文〔課程博士〕の受理（平成30年9月修了予定者）について」として上程され（主査・黒田彰、副査・坂井健、副査・水谷隆之〈立教大学准教授〉）、受理はされたが、その後の審議で、急逝のため審査続行不能ということになった。彼女の逝去は、受理の二日前の事であった。彼女の提出論文五部は、上記の審査員三名の手元に各一部を留め、二部は親族へ返却された。その後、私共審査員一同は、彼女の提出論文を読み、文学博士の学位を授与するに十分な内容を有するという結論に

至る。試問までには至らなかったが、博士の学位に値する、大変立派なものであったわけで、谷口さんの急逝は、惜しんで惜しみきれないものがある。

さて、日本文学科においては、彼女の業績を、『京都語文』の別冊として公刊、世に問うことで一決した。彼女の業績は、決して彼女一人のものではなく、学科、研究科の、即ち、佛教大学の、また、学界の優れた知的遺産に他ならず、放置するには余りに貴重な仕事だからである。

最後に、谷口博子さんの経歴を簡単に記しておく。谷口博子さんは、昭和二十八（一九五三）年生まれ、平成九年に本学通信教育部の国文学科を卒業後、平成十八年に本学通信課程の大学院博士課程へ、平成二十一年に本学大学院博士課程へ進み、平成二十九年に満期退学されている。本学においては、長友千代治氏、水谷隆之氏に師事し、水谷氏が立教大学へ転出された際、黒田が指導を受け継いだ。その間、看護師を務めながら、近松門左衛門の浄瑠璃作品を、終始変わらぬテーマに研究を続け、平成二十七年には、看護師を辞して、学問一筋に打ち込んだ。そして、平成三十年五月に学位論文提出に至った経緯は、前述の通りである。谷口さんの研究歴については、本書巻末の初出一覧をもってそれに代えたい。

令和元（二〇一九）年十一月

付記

本書の公刊に際し、大学院専攻主任の有田和臣先生には、一方ならぬ心遣いを賜った。また、加藤邦彦先生には、印刷製本上のお世話になった。審査員を代表し、心から御礼申し上げたい。

本書を故谷口博子さんの霊前に捧げる。